

佑啓

ゆうけい

発行 者
社会福祉法人 佑啓会
理事長 星 見 吉 英
〒290-0265
千葉県市原市今宮 1110-1
TEL 0436-36-7611
FAX 0436-36-7612
編集者 広報委員会

時給わずか100円台・・・

神戸の障害者施設、

改善指導へ

2月19日の読売新聞が報じた福祉作業所への労働基準監督署の立ち入り調査の記事である。(以下抜粋)

作業所は一定の条件を満たせば労働関係法規の適用が除外されるが、同署は、作業実態が訓練の範囲を超えた「労働」にあたるかと判断した。作業所への改善指導は異例。同様の事例は他にもあるとみられ、厚生労働省は近く、労働者としての保護を徹底するよう、関係施設に通告を出す。

これを受けて、行政は現状の把握にとりかかった。妻の働いている小さな作業所も調査の対象となったそうだ。大塚福祉作業所(通所授産施設)も例外ではなく、委託を受けている文京区から工賃規程等の報告を求められた。

遡ること昨年の10月、関係団体宛に障害者自立支援法の施行に伴う最低賃金適用除外許可手続書について「都道府県障害保健福祉主管部(局長)就労継続支援事業利用者の労働者性に関する留意事項について」厚生労働省障害福祉課長名で通知があった。「除外手続きについて」は、就

労働継続支援事業の増加に伴う賃金除外申請の事務処理の円滑化のための説明であり、後者は、就労継続支援事業利用者に関する留意事項となっている。が、こ

・A型利用者(雇用有)は、労働基準法上の労働者であることから、雇用するにあたっては、労働基準関係法令を遵守すること。

労働者の立場として不利益が起らないよう注意を喚起していたのである。更に

・A型利用者(雇用無)及びB型利用者は利用者の技能に応じた工賃の差別が設けられていないこと。とある。

同署は昨年11月、同育成会へ立ち入り調査し、収支報告書などを分析。この結果、同育成会は、作業収入を障害者に全額還元せず、遅刻すると工賃を減額するなど適用除外の条件を逸脱していることがわかった。

過去に勤務した授産施設においても、現在でも、工賃は、労働時間に対応して、しかも評価を加えて支給していた。通知のように適用除外をして労働者としてみなされなくても労働的側面は残

る。この対価としての工賃を、福祉施設だからといって労働時間や能力と切り離してしまうこと、不合理を感じてしまう。そもそも

もこれが差別なのか。利用者の中には、少ない金額であっても仕事をしたいことと工賃の関係は、経験的に理解している人もいる。だから遅刻はしたくないと朝の支度をするのである。除外をしたことによつて生ずる平等化、すなわち賃金と仕事をしたことの相関を崩してしまうことの方が社会的ルールを逸脱していることにならずである。

同育成会の昨年度の会計報告によると、作業収入は計約1600万円、この他に神戸市から年間約1400万円の補助金を受けているのに、障害者の工賃や福利厚生に使われた費用は計約400万円、残りは指導員の人員費などに充当されていた。最低賃金は、兵庫県では時給683円だが、関係者によると、同育成会の作業所では百数十円だったと見られている。

それぞれの作業内容や運営状況によつて経費も異なるので、収支の細かなことは紙面では分らない。妻に訊ねた。作業所の時間単価はいくらか。「300円程度」それでも利用者がいる。

先の通知
・本事業の利用者は、訓練等給付の事業の性格から、原則本人の希望に基づくものであるが、最終的な利用の可否については、暫定支給決定期間の仮利用の状況や専門機関等の意見も参考にし、最終的に市町村が決定すること。

これは給付費という税金が支給されるためだからと判断できるが、特にA型の利用者は、労働基準法上の労働者であるということについて、労働基準法上の労働者とは、職業の種類を問わず、

事業又は、事務所を使用される者で賃金を支払われる者」と規定されている。にもかかわらず市町村が決定する。事業所が使用するからしないかの裁量はどこにあるのか。

労働者と見なされる労働力を持った人が福祉的支援を受けなければならぬ現実と、福祉的支援があるから労働に関わる側面があるからなのだが、仕組みとしてもっと分かりやすくできないものだろうか。

同育成会の理事は「保護者の理解を得て10年以上前から行っており、違法と言われれば、作業所の運営は極めて難しい」と話している。

20日、知的障害者福祉協会が主催する、障害福祉経営セミナーでも早速この報道に関する質問が厚生労働省障害福祉課田中課長補佐に向けられた。回答は、労働対価として工賃の妥当性と福祉的支援の両側面があるという至極納得の内容であった。確かにこの労働者性という視点は過去の福祉現場から抜け落ちていたところであり、今回の自立支援法の目指すところとして明確だ。ただ労働者性という言葉には馴染めない奇異な表現として印象に残った。一人の人間の労働者性というのであれば他方は要支援者性とも言うのか。例えば「福祉的支援を必要とする人達の労働に対する適切な評価と報酬」などと分かりやすい表現にしたい。福祉的就労など曖昧な言葉の多いこの世界でより明確にできるのにはと思う。

以前は、支援内容に重点が置かれ、その一環として行われる作業に関しては、工賃の多寡よりも、その効果が問われていた。自信とハリのある生活のためになつていくのかどうか。そもそも更生施設には労働の対価という発想も無かった。支給金という程度である。毎月行われる保護者連絡会で、前月の収入と工賃の状況を報告すると、そんなことよりも所内で楽しく日々が送られているかを気に掛ける親御さんも多い。施設支援の視点によるところである。

工賃を利用者負担と比較することで支援法の批判に使われ始めたことと、労働者性を打ち出したことを関連づけることはしたくないものの、ほとんどの作業所や授産施設は最低賃金を上回らないだろう。作業だけの収益で見ると、職員も除外申請しなければならぬ。法に抵触しないような手続きを済ませ、これでよしとして、また低い水準で終わってしまう。事業者として、何をすべきなのか。

利用者の自由な作業との関わりと工賃増額など、考えれば考えるほど迷宮に入り込んだようであらう。

社会福祉法人は、現状のままでは、自立できない。今までは収入が決まっていたから残すことに専念していた。これも地味な積み重ねである。電気を提供して回る理事長や庶務担当。「もたれる物があつたらとりあえずもらえ、後から利用を考えろ」「安い店を探せ」その結果もたらした物はゴミとなり処理にお金がかかった。安い店のスcoopは使ったその場でグニヤリと曲がつ



た。職員会議の議題に電気料の推移が毎回あり、原因が究明されこまめにスイッチを切ることを徹底された。そのお陰で電力所がスイッチが陥没した。構造改革は節約などという消極的なことでは解決できないことを知らされた。

経営の研修と新聞報道が重なつたのでこんなことを書いたが・・・

そもそも魅力のある職場となれるであろうか。定款準則どおりの定款と、どこも変わらぬ運営規程で民間らしい運営になるのかどうか。多様な事業者の参入による競い合いが賃金の向上につながるのはいづかのところか。職員の確保とサービス満足度とは条件にはなっても一致するとは限らない。景気の回復とともに職員の確保も難しくなっている。いつそのことあらゆる基準を撤廃し、それぞれの法人にまかせてみるというのはどうだろうか。

一聖域無き規制緩和(儲けることを主眼とする体質改善だ。人に喜ばなければ儲からないという前提に立つてサービスを考える。職員はホストクラブのように人気者から給料が決まる。人の心にしみる話術、かゆいところに手が届くサービス。福祉職エグゼンションの導入。玄関に掲示されるのは運営規程ではなく、今月の支援者ナンバーワン。派手に儲けて、必要な人に還元するのである。お金のあふれる人からあふれたいサービス分の料金を頂き、負担が難しい人には無料のサービスを提供する。営利法人減免で社会に貢献するのである・・・

こんな時代は来ないと確信する。

三股 金利

(大塚福祉作業所 所長)

障害者自立支援法が
施行されて

竹内 正明

私の次女は、昭和五五年に母親が早期破水したため、病院に急行したが仮死状態で生まれ、医師の懸命な処置により産声を上げる事ができた。

この娘が二歳を過ぎた頃から言葉の発音が遅れていると感じられたが、いつも笑顔を絶やさず活発な女の子で、いつも動き回っていた。その後、保育園に入園したが他の園児と、遊戯や歌などを一緒にすることができず、行動が多動性で常に動き回って園外に出たり、保育士さんに多大な迷惑をかけたことが思い出される。

小学校入学前に市の教育委員会から、知的障害児であるため養護学校に行かれたらどうかと進言されたが地元の小学校に入学させていただいた。

小学校に入
学してからも
教室に止まっ
ていることが
できず、各学
年の教室をのぞ
き、長女の教室に授業中に入り、
名前を呼んだりしては帰宅して
から長女に叱られていた。また、
一歳年下の弟も同様の被害を多
大に被っている。この娘も高学
年になってから特殊学級に入り
先生によく指導をしていただき
少しは教室に止まるようになって
いった。



しかし、この娘は自分の立場が分からないため、大きなお世話ながら、低学年の児童の世話を見たがるようになり、児童に

嫌がられていた。また他人の持ち物と自分の持ち物の区別がつかず、先生からの連絡で父兄のところに謝罪に行ったりと親の心配がますます増えつつあった。この行動は今でも健在で、近所の方々の家やふる里学舎和田浦の寮内で遺憾なく発揮して、他の寮生にご迷惑をかけることを続けている。

その後は、中学、養護学校と進んだが、一八歳となり、この娘の進路で大きな壁に当たってしまった。知的障害者であること、行動が多動性であること、問題行動が多いこと、田舎であるため一番近いバス停まで四キロメートル以上あること、就職先がないこと、など多々あった。結果的にショートステイでお世話になったふる里学舎に感激して、この施設であれば安心してこの娘をお願いする事ができる

と判断して入所をお願いをし、お世話になることができた。初めの頃は入所を嫌がっていた娘もすぐに慣れたようで、帰省日になると進んで荷物を車に積んで誰よりも先に車に乗っている有様である。この娘にとつてふる里学舎が一番の安住の場所になっていることが分かったと親としては複雑な心境にさせられることもあったが心から喜んでいる。

入所当初は措置制度であったが、その後契約制度に替わった。当初不安もあった契約制度も、月日の経過とともに一段落したかと思えたところ、平成一七年の家族会の総会で里見理事

長から、昨年、国からグランドデザイン（案）が示された。これからの福祉は今までの措置制度、契約制度と違い介護保険制

度に移行されて大きく変わる等のお話をされた。その後、家族会の研修等で国から少しづつ示された法律、政令の内容の説明を聞いて少しづつ理解をして得然とした。

この制度は、障害者自立支援法に基づき、国が平成一八年一〇月一日から導入する「障害程度区分制度」で障害程度区分は身体、知的、精神障害者の障害の程度を障害の重さによって六区分に分け、受けられる福祉サービスを決める制度であった。認定作業は一〇六項目の認定調査を行い、その内容を厚生労働省の専用ソフトで一次判定し、その結果を基に市の審査会が医師の意見書や調査票の特記事項を考慮して最終判定すると言うものである。

私の娘は知的障害だけで、手足は自由に動く、会話もできるし食欲も旺盛であるため、身体に障害がある人と比較をすると判定結果は軽くなってしまう傾向にある。程度区分が軽いと、結果として娘が今、一番安心して安全に楽しく暮らしている場所である施設を出て行かなければならなくなってしまう事になる。娘と同様の入所者は学舎だけでも多数になると推定される。

昨年、千葉県内においても、このまま何も行動を起こさずに現状に対して黙っていたのでは知的障害を持つ子供たちの将来が不安であるため、知的障害者入所施設の家族会代表が集まり自立支援法に対して今後どの様に取り組んでいくかということ

で「千葉県知的障害者入所施設家族会連合会」が設立された。全国でも次々と設立され全国知

的障害者施設家族会連合会総会も開催されている。

今後、全国の知的障害者入所施設と家族会連合会とが一体となって活動し、自立支援法が少しでも知的障害者のために、良い方向に進むことができればと切に願っている。

（和田浦 保護者）



愛の流刑地へ

in 北海道

雪祭りごめんなさい

熊沢 徹

「殺して下さい。愛しているなら殺して下さい。」と戦場の誰かが言ったのなら大問題だが、これは話題の映画「愛の流刑地」のワンシーン。スクリーンの中で女は叫び、一方私は心の中で「オレもこんなこと言われた」「いや、言われたら怖い」と悶々としていた。そして、ふと横を見ると、気持ち悪いから念のため一つ席を空けて座った同僚の男性Sが恍惚の表情を浮かべている。さらに、周りを見渡せばほとんどが年配の方々ばかり。そういえば理事長も昨日は一人で見て来たと言っていたなあ。みんな一体何を考えてんだか・・・と自分を棚に上げて呟いてみる。これは、今年の職員旅行の札幌での一コマ。

雪祭りをしようとして二月六日から九日で二グループに分かれて一泊二日の旅。大変なのは理事長で、三泊四日で札幌に滞在。

おかげで誰よりも札幌の街を熟知し、誰よりも愛の流刑地の素晴らしさに精通し、誰よりも札幌ラーメンの味が実はどこもそんなに変わらないということを知っていた。

さて、こうゆう時の女性陣は実にアグレッシブというか食欲である。時間をフルに使い、北海道の味覚の探求、お土産選びに雪祭りという、映画、パチンコ、夜遊びと別に北海道じやなくとも出来ることをついでにしまふらしい生き物である。せっかく「非日常」を求めて来たのに、往き着くところが「日常」である。そんなことを「日常の流刑地だ」と思ってみたりもする。

北の大地への旅行ということとで幾分センチメンタルになっている面もあり、また朝から下町が止まらず、午前三時に和田浦を出てきたこともあって、デションはどんよりとした北海道の冬の空よりも更に低い。小樽では、石原裕次郎に合致する顔がなく、ガラス細工は私には眩しすぎて、美味しそうな寿司は下痢の材料にしか思えなかった・・・しかし、ホテルに戻り、お腹の中を全て出しきった後から徐々に体調は回復。キリンビール園でカニ三種類が食べ

放題なのになぜかみんなはタラバガニだけをおかわりするという離れ業をみせている頃には、本調子になっていた。その後の二次会ではカラオケでしつとりと札幌や北海道にまつわる歌に酔いしれていたのは最初だけで、最終的には男性職員が裸で踊り、雪祭りは裸祭りに愛わり、若い男性職員が血まみりに挙げられ、

この旅行最大の盛り上がりを見た。こうして札幌の熱く長い夜は幕を閉じていった・・・いや、閉じないが、書けない。二日はそれぞれが思い思いに過ごしたが、私は、既に映画評論家と札幌ツアーコンダクターとなった理事長に映画と観光をコーディネートしてもらい、冒険のような未知の体験をしている。



あつたはずの雪祭りは見学期間わずか四〇分足らずで私の記憶から消え去ってしまったこと、我が街の「くるまやラーメン」の味噌ラーメンがやっぱり世界一だということ、去年は北京へ今年北海道へと毎年いろいろなどところに行けて本当に幸せだということだった。羽田から九〇分。自宅に到着。たっだいま！！

追伸 愛の流刑地ごっこが流行りませんように！！
（和田浦支援員）

編集後記

窓から差し込む陽射しが暖かくなってきました。外にはたくさんのお花が咲き始め、冬の寒さはどこへやら・・・

春の足音が聞こえ始めた和田浦から
佐啓六〇号をお届けします。
（Y）